

千漢連会報

来年九月に

十周年記念行事あり！

副会長 八嶋溪風



巷間、「自助・共助・公助」ということが、社会福祉推進の合言葉になっています。

漢詩や詩吟をやっている人は、「自助」ということでは、合格点をあげてもよいのではと思っ
ています。自分の趣味を通じてQOL（生活の質）の向上を図る、ひいては、仲間づくりや
絆・地域の連携に寄与しているからです。

千葉県漢詩連盟では、来年九月十二日（土）、十周年記念行事として、自作漢詩の吟詠・朗読大会、自詠自書の展覧会を企画しています。十周年の節目を迎えて、団体としても、個人としても、さらに伸びるキッカケの機会と発表の場にできればと考えています。

漢詩も詩吟も古典の範疇。古典では、「身を修

める」ことが説かれています。吟も「修行」なり、詩もまた「修行」なり！古人曰く、「千練して字を成し、万錬して句を成す」と。賈島は「独行潭底影 数息樹辺身」という句を三年にして作り、その後題していわく、「两句三年得 一吟双泪流 知音如不賞 归臥故山秋」と。

「身を修める」にはどうしたらよいか？

- ① 自分の足りない所を知る
- ② 志を立てる
- ③ 師友を求め
- ④ 継続的に努力する

志とは、そのことに命を懸けてやることを決心をすること（意欲）
師とは、そのことを極めて体得した先達のこと

友とは、多少の先輩・後輩にあっても同列のもの。同じ線上で共に苦しみ、共に喜び、共に励ましつつ進んでいく間柄の人々のこと

継続的努力をするとは、いくら志を立てても「三日坊主」ではダメ。宮本武蔵は五輪の書の中で「百日の行を鍛といい、千日の業を錬という」と言っている。錬は水に入れたり泥にまぶしたりして、柔軟性を付けること。名刀は、鍛を通じて錬まで行かねば本物とならないのですね・・・

漢詩づくりを通じて、人としての品格の向上につなげるのも生涯の課題のように思えます。千漢連には一〇〇名を越える師友がおられます。

す。記念行事を機に互いに交流して、斯道発展の場になればと切に希求します。会員の皆様方のご協力とご支援をお願いします。

第十回総会開催

千葉県漢詩連盟第十回総会が平成二十六年七月十二日（土）十三時十五分より二松学舎大学柏校舎二〇五教室において開催された。出席会員数三十一名（他に委任状三十三名）のほか、来賓として全日本漢詩連盟会長石川岳堂先生がご臨席された。椎名耕道理事の司会のもとに議長に宮崎三郎氏が選出され肅々と議事の審議に入り、前年度及び当年度の業務報告並びに計画、決算報告並びに予算案等の議案はすべて原案通りに承認された。

鷲野翔堂会長からは、来年は、十周年を迎えるが会員拡大を目指して若い方々につなげるよう頑張りたいとの挨拶があり、続いて来賓の石川先生からも千葉県漢詩連盟の前途に、期待と激励の祝辞を頂戴した。今回は、役員の改選は無く顧問に宇野直人先生が新任され、ここで総会は滞りなく終了した。

午後二時からは石川先生の「房総の漢詩」（其十 鱸松塘：後述参照）をご講演頂いた。この後、五号館前で記念撮影を行い、地下食堂に移り懇親会が津田峻嶺理事の司会により開かれ、和やかなうちに四時半ごろ閉会となりました。



懇親会の石川顧問と鷺野会長



総会参加の皆さん



総会参加の皆さん

この度も、二松學舎大学柏校舎の宮崎靖久課長ほか職員の方々には、前準備やバスのご手配など大変お世話になりましたこと、厚くお礼申し上げます。

先週の土曜日(七月五日)、行田市で開かれた「藩校サミット」に出席してきた。江戸の三百諸侯はみな藩校をもっていた。会津の日新館、米沢の興讓館などは良く知られている。藩校サミットは古き良きものを次の世代に伝承していくということである。第一回は湯島聖堂で開かれ、十二回目である。第一回は湯島聖堂で開かれ、来年は福岡の修猷館の予定である。

行田の藩校は忍(おし)藩の進修館。良き伝統を継承しようとする活動が盛んである。最近では県立行田高校を県立行田進修館高校と校名変更したら偏差値が上がったそう。先生も生徒も意識が高まった結果である。古き良きものを次代に伝えていくのが必要なことは我々の



ご講演中の石川顧問

石川忠久先生講演会 「鱸松塘の紀行詩」

漢詩も全く同じで、藩校サミットの精神と相通ずるものがある。

サミットのお土産に年号表を貰ってきた。大化から平成までの年号と西暦とを一覧にしたものである。明治以後は一世一元(一人の天皇に一つの年号)だがその前はちよこちよこ変わっていた。何故ここで年号の話をするかというと、これからお話しする鱸松塘と関係するからだ。

鱸松塘は木更津の出身、郷土の誇る大詩人で、文政六年(一八一三)生まれである。松塘が誰と同時代だったのか、仲間や先生、生きた時代はどうだったかなど、所謂、時代の匂いを知っておくと覚え易いしその人を身近に感じることが出来る。文政は文化と併せて化政期と称されるが、十九世紀に入った頃である。次は天保で、三島中洲は天保元年(一八三〇)生まれなので松塘は中洲より七才上。そんな時代の人である。

鱸松塘は明治維新の時四十六歳、このころ七曲吟社を開いて多くの門弟を育てた。その後は吟遊詩人として全国を回ってその折々に沢山の詩を作ったが、今日は「日本名勝詩選」の中から幾つかを紹介する。

木曾道中(二)

信州従是接濃州 信州是より濃州に接す

十石峰前水合流 十石峰前 水合流す

溪壑似知人世換 溪壑は知るに似たり人世の

換わるを

一宵嗚咽送征愁 一宵嗚咽して征愁を送る

明治元年、戊辰戦争の最中の作。「川の水も人の世の移り変わりを知っているかのよう、一晩中嗚咽していた」と、旅にひっかけて変わ

りゆく世の中を詠っている。あからさまに表現すると押しつけがましくなるが、これはそれとなく詠っており洒落た品の良い詩である。

自直江津赴東岩瀬舟中

截浪双輪潮路通 浪を截(き)つて双輪潮路通ず
不須帆力假東風 須いず帆力東風を假(か)るを
玻璃面面船窓敞 玻璃面々船窓敞(ほが)らかなり
臥見青山入越中 臥して青山を見て越中に入る
明治十七年の作。詩集『房山楼集』の中の「北遊存稿」に入っている。帆の要らない双輪の蒸気船、広く明るいガラスの窓など、新しい題材を詠んでいる。

金澤

小人謀利率皆然 小人利を謀る率(おおむ)ね皆然り
瀉鹵能開幾頃田 瀉鹵(せきご)能く開く幾頃の田
奪却漁村蝦菜業 漁村蝦菜(かさい)の業を奪却す
湖山無復旧風煙 湖山復た旧風煙なし
「瀉鹵」は干潟、「蝦菜の業」は漁業。金儲けのために干潟が干拓され田圃になってしまった。美しい風景がすっかり変わってしまったと、旅の詩人の嘆く声が聞こえるようだ。

九月卅日 舟抵松江

七旬遊跡寄山楹 七旬の遊跡 山楹に寄す
暮醉朝吟無限情 暮醉朝吟 限なきの情
知否湖天今日雨 知るや否や湖天 今日雨
一帆暝色入松城 一帆の暝色 松城に入る
明治十六年の作。雨の多い松江のしっとりとした風景を詠んでいる。何気ない処に目を付けるのが吟遊詩人としての松塘の一つの特長で

ある。「楹」は柱、「山楹」は山亭の意で、陸游の詩に出てくる。「山楹 遠眺を快くし、松吹 幽聴にかなう」

函港雜詠四首

繞港郡山列画屏 港を繞る郡山画屏列す
明波一片鏡光青 明波一片鏡光青し
誰知浩蕩北冥水 誰か知らん 浩蕩北冥の水
匯作穹環巴字形 匯(かい)して穹環巴字の形を作すを
明治八年の作。詩集『超海集』にある。全二十余首の中の四首。「匯」は「廻」と同じ。結局で、湾の形の特色をとらえて「巴」と形容したのが面白い。

残墨蕭蕭野草荒

残墨蕭蕭野草荒 残墨蕭々として野草荒る
我来下馬弔斜陽 我来つて馬を下り斜陽を弔す
全家碧血瘞黄土 全家碧血 黄土を瘞(うず)む
一死千秋千代岡 一死千秋 千代が岡
函館戦争で戦死した中島木鶏を悼んで詠んだ詩。中島木鶏は幕府の軍艦の取り締まりで、榎本武揚と共に函館戦争で戦った。榎本は降伏して後に新政府の要職に就いたが、これと対照的に中島は最後まで奮戦し、二人の息子と共に戦死した。幕府に殉じた木鶏の義を暗に称えている。「碧血」は「恨みを含んだ血」の意。

港頭月落水煙凝

港頭月落水煙凝 港頭月落ちて水煙凝る
夜色蒼茫海氣蒸 夜色蒼茫として海氣蒸す
散布波心紅百点 波心に散布す紅百点
星星都是客船燈 星々都是是れ客船の燈
結局が良い。従来詩には見られない新しい情景描写だ。

一望川原不見家 一望川原 家を見ず
疎林落日帶啼鴉 疎林落日 啼鴉を帶ぶ
幾群野馬無人牧 幾群の野馬 人の牧する無し
恣嚼秋郊滿地花 恣に嚼む秋郊滿地の花
これも結局に新しい見方が見られる。

雨中過觀音崎

廿里潮程一霎風 廿里の潮程一霎(いっしょう)の風
海門山色滴船篷 海門の山色船篷に滴たる
春帆細雨相州路 春帆細雨相州の路
人在少陵詩句中 人は少陵詩句の中に在り
「霎」は短い意で、「一霎の風」はサーと吹く風。この詩も結局が面白い。少陵は杜甫のことで、杜甫が晩年に洞庭湖から湘水を渡った時、これと雰囲気の似た詩を幾つか詠んでいる。そのことを言っている。

久里浜

残煙澹水帶芦花 残煙澹水 芦花を帶ぶ
落照明邊三兩家 落照明らかなる辺三兩の家
自笑半生如旅雁 自ら笑う 半生旅雁の如きを
秋風纔起又天涯 秋風纔に起れば又天涯
秋風が吹き始めると、また天の果てに出かけなくなる。まるで旅の雁のようだ、吟遊詩人としての自分のことを詠んでいる。

再游芳山

昔游二十七春風 昔游二十七春風
重入桜雲万樹中 重ねて入る桜雲万樹の中
誰識衣香釵影地 誰か識らん衣香釵影の地
有人来弔古行宮 人有り来り弔う古行宮

「芳山」は吉野山。この詩は藤井竹外を意識した作である。竹外は「芳野」で「眉雪の老僧：・・・南朝を説く」と詠っている。これは元稹(白楽天の友人)が「行宮」で「白頭の宮女・・・玄宗を説く」と詠んだものをふまえている。松塘のこの詩は「衣香釵影(良い香りの着物、かんざしの影)」と女官を登場させており、元稹の「行宮」の世界を再現させた作品である。

夕陽人立落花風 夕陽人は立つ落花の風

千古興衰一瞬中 千古興衰一瞬の中

欲向山僧尋往時 山僧に向つて往時を尋ねんと欲す

残紅飛入古禅宮 残紅飛び入る古禅宮

これも元稹、竹外の名作を下敷きになっている。「古」が同字重出になっているが、「古禅宮」を「梵王宮」としているテキストもある。

ここで松塘が活躍した幕末から明治の漢詩人の系譜について述べる。まず頼山陽、その九歳下が梁川星巖、この二人は一七八〇年代の生まれ。星巖の弟子の小野湖山、その次に鱸松塘(二八―三三年生まれ)が来る。頼山陽たちの一代後だ。更にその一世代後に森槐南、本田種竹、国分青崖らが出た。この三人は一八六〇年代生まれで明治になって大いに活躍し、明治の三羽鳥といわれた。

こうしたことを見取り図として頭に入れておく。幕末から明治にかけての流れが理解し易い。しかし、この後が続かなくなってしまう。最後の花を咲かせたのが文久の生まれの森鷗外、嘉納治五郎、岡倉天心である。

最後に再び年号の話に戻る。前に述べたように幕末の頃は年号がちよこちよこと変わったが、年号を頭に入れておく。幕末から明治にかけて流れが良く理解できるし、また覚え易い。年号の効用は非常に大きい。世界で年号を使っているのは日本だけで一種の文化遺産であり、絶対に絶やさないようにしなければならぬ。

(文責 薄井)



講演会風景

特別講演会に参加して

桃李書院

米澤たみ子

七月十二日、二松学舎大学柏校舎においての特別講演会に参加してきました。柏駅よりスクールバス(無料)に乗ること三十分。旧沼南町の田舎に緑に囲まれた付属中学・高校そして大学と並んでいました。学業に専念できる別世界の雰囲気です。職員の方々の笑顔に迎えられ、温かい気持ちになりました。

石川忠久先生の演題は、「鱸松塘の紀行詩」。初めて耳にする鱸松塘という名前でしたが、幕末から明治の人であること、石川先生が最近に鱸松塘のお孫さんに会っていることなどお話ししてくださり、段々身近に感じられました。そして、漢詩の理解を深める為には、時代背景をつかむの良いと大化から平成までの年号・西暦の一覧表をプレゼントして下さいました。紀行詩は、木曾、直江津、金沢、松江、函館など計八首の漢詩を鑑賞しました。二度読んでからのわかりやすい説明、そして最後に中国語で読んでくださり、韻文の流れやリズムが心地よく感じられました。

『書窓』誌(桃李書院で発行している書道雑誌)で、櫻井巖道先生(創設者)の巻頭詩、また櫻井宏行先生(現主宰)の毎月の漢詩は黙読していました。しかし、リズムの良い音読をする。と更に理解が深まる気がします。そして、語彙が豊富になると、人間が豊かになれる気がします。漢詩は難しいと遠ざけることなく、漢文を初めて習ったころの学生気分に戻り、再度、なじみのある漢詩から親しんでみようかと思えました。櫻井先生にもお会いでき、そして誌友の方にも会えてとても有意義なひと時でした。ありがとうございました。

(注)米澤さんは、元二松学舎大学付属柏高校教諭で弊会員の櫻井宏行氏の主宰する桃李書院の会員で、櫻井氏の勧めで、特別講演会を聴講された。桃李書院の会誌『書窓』に掲載された記事を、ご本人並びに櫻井主宰のご了解のもとに掲載させていただいた。有難うございました。

漢詩の鑑賞―梁川星巖

「浪淘集」を読む(九)

鷺野正明

平成二十六年八月三日、第十一回研修会が開催された。以下はその折りに読んだ詩である。星巖と妻の張紅蘭は、南房総の洲崎から歩を進めて那古山へ行き、那古寺の「大悲閣」から朝日に照らされる鏡ヶ浦を見た

旭影回光上石台 旭影光を回らして石台上る
分明積水一奩開 分明なり積水一奩開く
不知黯澹雨將至 知らず 暗澹として雨の將

只道仙娥呵鏡來 只だ道ふ 仙娥鏡を呵して
來たと

微雨が俄かに降り、海上の青々とした山々がみな濛朧の中に沈んだのであったが、その直前、石台の上から朝日が登り、鏡ヶ浦を照らした。その一瞬を「一奩開く」と言い、さらに「仙娥が鏡に息を吹きかけた」と言う。「鏡」に掛けた発想のすばらしさ。

星巖は館山で景山氏を訪ねたり、里見氏の故墟のあたりを通つてもいる。景山氏は、藺村(館山市、旧九重村)の人で、かつて大沼枕山が宿を借りた。枕山の『房山集』に「景山氏に宿り、酒に對して無聊、因りて歌を作る」とある。原采蘋も訪ねている。景山氏の書齋は含翠書屋と云う。

残山剩水屋西東 残山 剩水 屋の西東
穠麴香濃野逕風 穠麴(はあ)の香は濃やかなり

晚翠千重遮不徹 晚翠千重 遮りて徹らず
書声漏出溼雲中 書声漏れ出づ溼雲(しゅううん)の中

山と川が屋敷をとりまき、野の小道を吹く風には稲の豊かな香りがただよう。青々とした木々が重なり、屋敷を見通すことはできないが、雲のなかから読書の声が漏れてくる。学問好きな景山氏の人となり知られる。「残山剩水」は「残山剩水」と同じ。高山の破片と大河のあまり水、の意。「穠麴」は、稲。「晚翠」は、冬まで枯れずに青々としている木。「溼」は「湿」の本字。星巖は難しい漢字を使うことでも有名である。

里見氏の故墟を通つては次のように詠う。
連雲第宅剩山邱 連雲の第宅 山邱を剩(あま)す
草樹荒涼易得秋 草樹荒涼 秋を得易し
一点精靈何処去 一点の精靈 何処くに去る
野干來穴石鰭頭 野干來たり穴す 石鰭頭

「野干」の語源は梵語の「シユリガアラ(悉伽羅)」。ジャツカルである。日本では「狐」を指して言う。この詩の題の下に説明があり、星巖は「野干」を「狐」としてではなく、「犬」として捉えている。南房総は「犬」の付く地名が多く、かつて里見氏が領有していた。『南総里見八犬伝』の舞台でもある。

(つづく)

「トピックス①」

石川忠久顧問の漢詩詩碑、

真鶴岬に建立される!

全漢連十周年記念事業の一つとして、去る三月三十日(日)、石川顧問の詩碑の入魂式が執り行われた。場所は、神奈川県真鶴町「お林展望公園」の一角で、背後には二本の松の巨木が、碑を見守るようであり、傍に桜の古樹が祝福するように満開であったとのこと。
今回はその写真を掲載します。



石川忠久顧問の漢詩詩碑

詩碑に刻まれた七言律詩は、次の通り。

真鶴岸頭書懷

岳堂 石川忠久

背指靈峰向海澗 靈峰を背指して海澗に向かへば
清波縹緲舞游禽 清波縹緲として游禽舞ふ
一条航跡青螺泛 一条の航跡 青螺泛かび
万里雲間白日沈 万里の雲間 白日沈む
曠士壯懷空眼界 曠士の壯懷 眼界空に
騷人雅興滿胸襟 騷人の雅興 胸襟滿つ
巖頭佇立馳遙思 巖頭佇立して遙思を馳すれば
何羨棲遲丘壑心 何ぞ羨まん棲遲丘壑の心

「全日本漢詩大会宮城大会」に

入賞 おめでとうございます！

平成二十六年度全日本漢詩大会宮城大会が、平成二十六年九月二十日に宮城県仙台市の仙台市民会館で盛大に開催されました。全国から四七〇編の漢詩が寄せられ、特別賞十一編、秀作十六編、佳作十三編、入選十六編、計五十六編が表彰されました。

当連盟からは、佳作に、青木智江さん、斎藤房江さん、清水直美さん、清水義孝さん、宮崎三郎さん、の五名が受賞されました。おめでとうございます！

その受賞漢詩を紹介します。

○広瀬川

青木智江

秋晴水透浪如銀 秋晴 水は透り浪は銀の如し
処処跳声輝碧鱗 処々の跳声 碧鱗輝く
終旅归来郷里澳 旅を終え帰り来る郷里の澳
鮭魚腹赤継生辰 鮭魚腹は赤し生を継ぐ辰

○震災後訪松島五大堂

斎藤房江

陸前海暖一望平 陸前の海暖かにして一望平らかなり
尚見朱橋堂宇甍 尚見る朱橋 堂宇の甍
風裡白雲閑去処 風裡 白雲 閑に去る処
忽聞松籟恰如箏 忽ち聞く松籟 恰も箏の如し

○氷上貴公子

清水直美

氷上空中旋轉時 氷上 空中 旋轉の時
嫦娥応羨淑清姿 嫦娥 応に羨むべし淑清の姿
金牌相抱語郷土 金牌相抱き郷土を語り
一笑柔和紅頬児 一笑柔和 紅頬の児

○日月潭

清水義孝

早曉水辺煙靄籠 早曉の水辺 煙靄籠む
木階徐下緑陰通 木階 徐に下れば緑陰通ず
樹間幽見山頭月 樹間 幽かに見る山頭の月
如射朝暘撓半弓 朝暘を射る如く半弓撓む

○隣舍紅梅

宮崎三郎

隣叟懷痾住杏林 隣叟 痾を懷き杏林に住まり
風寒時節只孤斟 風寒の時節 只孤斟す
莫忘愛養紅梅樹 忘るる莫れ愛養せし紅梅の樹
平癒君帰花色深 平癒し君帰らば花色深からん

千漢連漢詩集『房総風雅』第三集

作品は十二月末までに！

『房総風雅第三集』発行のご案内

平成二十七年年度に当連盟は、十周年を迎える。その記念事業の一環として、漢詩集『房総風雅』第三集を発刊することになった。

第三集の募集要項は下記の通り。会員の皆様全員の漢詩を収載いたしたく、奮って、ご参加をお願い申し上げます。

1. 趣旨 … 会員相互の交流をはかると共に、作詩の喜びを味わい、且つ、自作の漢詩を後世に残し、更に、漢詩の輪を広げる。
2. 対象者 … 千葉県漢詩連盟会員
3. 内容 … 千葉県に関連する景勝名跡・先哲等
4. 作品 … 一人、五言絶句または七言絶句、二首以内、又は律詩一首とする。
5. 参加費 … 一人絶句二首又は律詩一首で五千元。但し、絶句一首の場合、四千元。(書留または振込)
6. 振込先 … ゆうちよ銀行
7. 口座名 … 千葉県漢詩連盟
8. 装丁 … 一人一頁とし、A5判とする。
9. 応募方法 … 別紙の応募用紙に必要事項を記載(本文は旧字、書き下し文は当用漢字使用)して事務局まで。
9. 応募された方には、二首の場合五冊を配布し、一首の場合四冊を配布する。以上

千葉詩壇(到着順)

「台湾吟行」

鵝鑾鼻岬

白聖灯台聳碧空
三洋合処素波中
遙望比島鵝鑾岬
海上帆幟翻惠風

相澤無有

鵝鑾鼻岬

恒春光満浪声饒
海角風輕緑樹揺
航跡分潮青与白
征人更望意遙遙

青木智江

鵝鑾鼻岬

茫茫滄海度清風
華島南端一望中
何国賈船姿尽処
三洋染出暮雲紅

清水露山

鵝鑾鼻岬

炎陽粲粲欲焼天
白砌徐行緑樹鮮
雖合三洋何処是
沙鷗遠噪衝波翩

清水直美

鵝鑾鼻岬

燦然白日渺滄瀛
遠訪墾丁今日晴
電視劇中曾看景
不聞冲浪少年声
(注) 冲浪・サーフィン

菅原有恒

日月潭朝景

早起独巡潭水辺
両三鳥影泛清漣
淡煙漸散好風度
回首蒼山鈎月懸

薄井隆山

日月潭早曉

残月将消淡靄蒙
延延傍水木蹊通
櫓声微響漁翁影
曙日随舟漸漸紅

岡安千尋

早曉日月潭

山莊漸覺醉余眠
靄靄朝霞物外天
曳杖欲窮千里目
白紅花発照湖辺

齋藤惠芳

日月潭早曉

清風習習払輕煙
澄水潭潭涵岫巔
東仰日華西片月
回翔孤鳥欲明天

宮崎三郎

日月潭

朝雨忽過懸彩虹
日輪照出水煙濛
光華小島在何処
香溢万花開白紅

鷺野翔堂

「以上 台湾吟行」

北大地愉高爾夫

友朋相集札樽東
海色山容佳景中
剪剪草坪正翠簾
打球左右失深叢

芳野禎文

日本東京觀故宮博物院逸品

歷代珠珍文物連
徐行細看意悠然
東坡真跡此今在
才学拔群超世縁

富樫貞華

賀長女卜居木場

新建室家臨木場
鶯歌婉轉草花香
積多善行必多福
庶幾夤夤其葉長

富樫貞華

るの天

朋友誘我訪紫陽花寺

中村八壽男

梅天陰鬱昼猶昏 梅天 陰鬱 昼猶お昏し
細雨霑衣懶出門 細雨衣を霑し門を出ずるに
懶うし

青白紫紅庭院裏 青白紫紅 庭院の裏
穿花信步洗心魂 花を穿ち歩に信せて心魂を洗う

遊那珂川

相澤無有

風清早曉泛扁舟 風清き早曉扁舟を泛ぶ

日出でて煙霞漸々として収まる

笠叟垂綸魚忽躍 笠叟綸を垂るれば魚忽ち躍り

銀鱗澆澗一江流 銀鱗澆澗一江流る

江都豪雨

宮崎三郎

打窓夏雨似翻盆 窓を打つ夏雨盆を翻すが似く

紫陌茶樓晝尚昏 紫陌の茶樓 晝尚ほ昏し

忽見屋除紅一傘 忽ち見る屋除の紅一傘

何為独佇遠雷奔 何為れぞ独り佇むや遠雷奔るに

白神岩木山途中

八嶋溪風

沿北上山川亦隨 北上川に沿えば山亦た隨う

新添翠雨映窓移 新たに添う翠雨窓に映じて移る

三巢縦断林檎圃 三巢縦断すれば林檎の圃

乍懷歌謡采邑詩 乍ち懷う歌謡采邑の詩

夏日過湯島聖堂

八嶋溪風

踏上石階自仰欽 踏みて石階を上り自ずから仰ぎ欽う

新蟬嘒吐清音 新蟬嘒々清音を吐く

要知楷樹枝何直 知るを要す楷樹の枝の何ぞ直なるかを

仁礼如尊韻亦深 仁礼を尊ぶが如く韻も亦た深し

訪立石寺

薄井蹊山

山寺曳吟杖 山寺に吟杖を曳けば

天澄宿雨収 天澄みて宿雨収まる

老杉垂曲磴 老杉 曲磴に垂れ

嫩葉映清流 嫩葉 清流に映ず

碑碣蟬聲噪 碑碣 蟬声噪がしく

閣堂風籟幽 閣堂 風籟幽かなり

暫時塵外境 暫時 塵外の境

欲去夕雲悠 去らんと欲すれば夕雲悠かなり

鎌倉大銀杏有感

津田峻一

銀杏曾為刺客媒 銀杏曾て刺客の媒を為す

後年風伯葛吹摧 後年風伯葛んぞ吹き摧く

今留枯幹添怨恨 今留む 枯幹 怨恨を添ふ

只願新条成逸材 只願はくは新条の逸材と成らんことを

訪天龍寺

津田峻一

渡月橋頭精舍篁 渡月の橋頭 精舍篁

尊公建立祓余殃 尊公建立して余殃を祓ふ

幽庭池水映山影 幽庭の池水 山影を映し

法殿雲龍睨八方 法殿の雲龍 八方を睨む

故宮博物院觀翠玉白菜

清水露山

珍珠人簇步猶難 珍珠 人簇がりて歩むこと猶お難し

彫琢鮮妍忽衝肝 彫琢 鮮妍 忽ち肝を衝く

絡緯在巔將欲躍 絡緯 巔に在りて將に躍ねんと欲す

正逃俗客似求安 正に俗客を逃れて安きを求めんとするに似たり

松戸本土寺尋紫陽花

矢尾鏃風

梅雨促花発 梅雨花の発くを促す

鮮鮮青紫紅 鮮々たり 青紫紅

微風揺白露 微風 白露を揺らせば

艷萼正天工 艷萼 正に天工

草堂立秋

矢尾鏃風

数声蟋蟀澹生愁 数声の蟋蟀 澹かに愁を生ず

樹竹園庭瀨氣流 樹竹 園庭 瀨氣流る

従是讀書時節好 是れ従り讀書時節好し

草堂涼動入新秋 草堂涼は動き新秋に入る

尋佐渡金山

小澤州風

驅車九折緑陰中 車を駆つて九折す緑陰の中

岩窟遙看聳碧空 岩窟遙に看る碧空に聳ゆるを

冷氣漂揺坑道歩 冷氣漂揺 坑道歩めば

金如忽出一灯紅 金忽ち出づるが如く一灯紅なり

觀多胡郡碑

齊藤洗鷺

最古真書刻字雄 最古の真書 刻字雄たり

石碑色古納堂中 石碑の色古りて堂中に納まる

遙懷往昔黎民事 遙に懷ふ往昔黎民の事

騷客肅然斜日紅 騷客肅然として斜日紅なり

新涼

木村成憲

崇朝巷陌去尋涼 崇朝巷陌去きて涼を尋ぬ

貝塚蕭森千步岡 貝塚蕭森たり千歩の岡

忽入公園池上路 忽ち入る公園 池上の路

鯉魚水動白蓮香 鯉魚水動いて白蓮香る

食香魚

発発銀鱗映碧流
 蒸蒸焚火荻蘆洲
 釣魚穿串添塩炙
 煙裏鮓香初夏遊

岡安千尋

悼雅兄急逝

年賀常書枯淡評
 南天実好更花清
 今宵累累紅珠滿
 遺影無言双眼明

長島ツタエ

柳陰垂釣

湖畔柳陰投釣糸
 浮標不動白雲滋
 透過藻色魚眠穩
 夕日已沈帰去遅

菅原随貞

湖畔 柳陰 釣糸を投す
 浮標動かず白雲滋し
 藻色を透過して魚眠ること
 穏やかなり
 夕日 已に沈むも帰去遅し

高遠城址公園看桜

裊裊桜雲映彩霞
 春風駘蕩震垂華
 欲帰明月来相照
 恋恋徘徊空只嗟

小久保洋子

裊々たる桜雲 彩霞に映じ
 春風駘蕩ととして垂華を震
 るわす
 帰らんと欲して明月来たり
 て相照らす
 恋々徘徊して空しく只だ嗟す

登東京晴空塔

塔高独秀自悠然
 劳脚登来落日辺
 城市模糊塵霧帯
 東湾武岳染紅鮮

佐久間溪泉

塔高く独り秀でて自ずから悠然
 脚を勞わり登り来る落日の辺
 城市 模糊として塵霧帯び
 東湾武岳紅に染って鮮やかなり

賀長女生日

今宵生日雅筵開
 有幸重陽佳節回
 妍麗黄花庭裏發
 偏希壯健瓣浮杯

宮本美恵子

送友人之倫敦

友朋忽作出差人
 千里航程多苦辛
 交酒論詩常習事
 一年歲月必傷神

根津静男

看市川花火大会

闇夜河辺煙火開
 浴衣觀客納涼回
 晴空碧水双眸映
 喜得煌煌一瞬華

秋葉曉風

遊巴黎 其一

法都從古好文華
 今尚留存鉄綉花
 正是阿孫望訪処
 電梯登頂碧天遐

訪埃菲爾鐵塔(エッフェルとう)

柳田誼軒

其二 吉維尼(ジュヴェニ)莫内(モネ)旧宅

滿庭繚乱郁金香
 藤架柳堤還翠篁
 池面睡蓮蛙市噪
 画師名作孰風光

柳田誼軒

トピックス②

鷺野会長がさいたまアリーナ教室
 で漢詩講座を開催されました！



講義中の鷺野会長と会場風景

去る九月十一日(水)NHK文化センターの主催するさいたまアリーナ教室で、「漢詩を楽しむ」という題で、開催されました。「読むから詠む」という副題がついており、漢詩の歴史、詩の形式から詩語のお話、李白や白居易の詩をテキストに、読む楽しみと作る楽しみ、作詩のルールを説明しながら、わかりやすく話されました。来年一月から三月にかけて新しい講座がスタートする由。題は「はじめての漢詩創作」とのこと。是非お申し込みください。

問合せ先は、TEL 〇四八上六〇〇—〇〇九一
 さいたまアリーナ教室まで。

漢詩創作講座(初級・中級)の

第八期生が誕生しました!

○漢詩創作講座(中級)作品

聽杜鵑

青木智江

唐山杜宇促人歸 唐山の杜宇 人の帰るを促す
東海鳴鵑念愛飛 東海の鳴鵑 愛を念いて飛ぶ
独待林亭声声裏 独り待つ林亭 声々の裏
橘花漾漾月明微 橘花漾々 月明微かなり
(注)元歌…ほととぎす花橘の香をとめて 鳴く
や昔の人の恋しき(新古今和歌集よみ人知らず)

午睡

薄井蹊山

倦書凭榻竹簾辺 書に倦みて榻に凭る竹簾の辺り
暑氣忽侵貪惰眠 暑氣忽ち侵して惰眠を貪る
夢裡微聞雷鼓響 夢裡微かに聞く雷鼓の響
覺來風爽雨余天 覺め来れば風爽やかなり
雨余の天

待乳山聖天

岡安千尋

蘿蔔重重磴道傍 蘿蔔重々 磴道の傍ら
人人携手捧祠堂 人々手を携え祠堂に捧ぐ
聖天鎮座小丘上 聖天鎮座す小丘の上
風度松間墨水長 風は松間を度り墨水長し

訪信州大町温泉郷

小澤州風

弟兄共到白雲辺 弟兄共に到る白雲の辺
四望峰巒紅葉妍 四もに望めば峰巒 紅葉妍なり
客舍傾杯相語後 客舎杯を傾け相い語りし後
浴湯伸欠仰星天 浴湯伸欠 星天を仰ぐ

高尔夫(ゴルフ)

木村成憲

万緑高原一径通 万緑の高原一径通ず
新陰颯颯遍薰風 新陰颯々として薰風遍ねし
時当出楽青天下 時に当に出でて楽しむべし
青天の下

曲直高低西又東

曲直 高低 西又た東

江馬細香展

齋藤洗鷲

久懷纒遂遠来尋 久懷纒に遂げて遠く来たり尋ぬ
庭裏四方青竹深 庭裏 四方青竹深し
書画詩文余壁上 書画詩文 壁上に余す
忘帰相慕古人心 帰るを忘れ相い慕う古人の心

行旅

中村八壽夫

夜来煙雨似輕沙 夜来の煙雨 輕沙に似たり
滿地茫茫絶景遮 滿地茫茫 絶景を遮ざる
唯浴温泉愉不尽 唯だ温泉に浴すれば愉しみ
悠悠伸脚客人家 悠々脚を伸ぶ客人の家
尽きず

芳野山逍遙

宮崎三郎

桜花万朵又千枝 桜花万朵 又千枝
窈窕芳山信歩之 窈窕たる芳山歩に信せて之
遠想南朝都似夢 遠く想ふ南朝都て夢の似く
夕風一陣落紅滋 夕風一陣 落紅滋し

霖雨忽晴愉高爾夫

芳野禎文

冥冥細細漏天中 冥々細々 漏天の中
与友驅車房総東 友と車を驅る房総の東
啼鳥呼晴盈爽氣 啼鳥 晴れを呼び爽氣盈つ
打球拭汗夕陽紅 球を打ち汗を拭えば夕陽紅なり

○漢詩創作講座(初級)作品

訪函館港

井上夏央里

北冥春港夕陽娟 北冥の春港 夕陽娟たり
漁子解網烏賊船 漁子網を解く烏賊の船
祖妣忽懷居此地 祖妣忽ち懷ふ此の地に居りしを
同看今夜釣灯聯 同に見ん今夜釣灯の聯なるを

比国山岳州懷母

加藤 武

遠見柵田明月時 遠く見る柵田 明月の時
老夫独歩荷鋤姿 老夫独り歩み鋤を荷ふの姿
辞郷兩歲帰何日 郷を辞してより兩歲帰るは
阿母孤愁夜臥遲 阿母は孤り愁いて夜臥する
何の日か
こと遅からん

遊支笏湖

菊田聖山

馳車北路到澄湖 車を馳せ北路 澄湖に到る
淼淼清幽小岳紆 淼々 清幽 小岳紆る
泛艇与孫遊尽日 艇を泛かべ孫と遊ぶこと尽日
夕陽將没淡紅舖 夕陽將に没せんとして淡紅舖く

市谷観桜

紅桜緑草野亭通 蝶舞禽飛戲晚風
 吟客醉春還醉酒 森羅万象夕陽中

小久保洋子

紅桜 緑草 野亭に通じ
 蝶舞い 禽飛び 晚風に戯る
 吟客 春に酔い 還た酒に酔ふ
 森羅万象 夕陽の中

与夫尋蜚里

雨晴風軟歩幽溪 無月昏冥手共携
 凝視微微螢色寂 仰天銀漢兩星堤

佐久間溪泉

雨晴れ風軟かに幽溪を歩す
 月無く昏冥 手 共に携ふ
 凝視すれば微々として螢色寂たり
 天を仰げば銀漢 兩星の堤

村巷出梅

村巷冥冥煙雨深 泥途懶歩氣消沈
 忽聽恰恰郭公度 如促出梅声爽吟

菅原随貞

村巷冥々 煙雨深し
 泥途 歩むに懶く 氣消沈す
 忽ち聴く 恰々郭公の度を
 出梅を促すが如く 声 爽吟

喜馬拉雅(マラヤ)山中見役馬

暮天欲雪烈風寒 瘦馬能堪石塊搬
 応是作垣困瓦屋 孤村尚遠道逾難

長島ツタエ

暮天雪ふらんとして烈風寒し
 瘦馬能く石塊を搬ぶに堪へたり
 応に是れ垣と作して瓦屋を
 困むべし
 孤村尚ほ遠く道 逾いよ難し

梅天閑詠

梅天未霽湿衣襟 日暮冥冥寂寞心
 酌酒明朝思有楽 人生亦是半晴陰

根津静男

梅天未だ霽れず衣襟を湿おす
 日暮れて冥々 寂寞の心
 酒を酌んで明朝楽しみ有るを思う
 人生も亦た是れ晴陰半ばなり

偶感

追懷昔日慢心深 氣概只多常忽箴
 自問余生何以過 賢人晚節欲相欽

蓼沼進風

追懷す 昔日 慢心深く
 氣概只だ多くして常に箴を
 忽(ゆるが)せにす
 自問す余生何を以てか過さんと
 賢人の晩節 相い欽(した)
 はんと欲す

紫陽花

雨余小院紫陽花 沾露繡毬清麗誇
 夫子好看終不厭 低頭懷昔日西斜

宮本美恵子

雨余の小院 紫陽の花
 露に沾ひ繡毬 清麗誇る
 夫子好んで見て終に厭かず
 頭を低れて昔を懐へば
 日 西に斜めなり

帝釈天

輕風穿過二天門 彫刻回廊匠意存
 經典衆生兼属相 表情潑洩鑿痕温

森崎直武

輕風穿ち過ぐ二天門
 彫刻 回廊 匠意存す
 經典の衆生と属相と
 表情潑洩 鑿痕温かなり

第九期漢詩創作講座のご案内

○初級漢詩創作講座

● 対象者…漢詩作りは初めての方、或はもう一度勉強し直してみようとお考えの方の為の講座。
 ● 会員でない方も大いに歓迎しますのでお誘い下さい！

○中級漢詩創作講座

- 対象者…千葉県漢詩連盟の会員に限る。
 - 漢詩作りの経験がある方、或は投稿してみようとお考えの方の為の講座
 - 期間…十一月二十一日から五ヶ月間
 - 月一回第三木曜日午後三時から六時
 - 場所…初級に同じ
 - 講師…鷺野会長(国士館大学教授)
 - 費用…受講料一万円
 - 申込方法…初級・中級とも、同封の参加申込書を事務局宛に送付してください。現金は講座初日に持参下さい。振込しない事！
 - なお、中級以上の方で、会場にこられない方は、直接、会長に批正していただけます。投稿規定参照。
- お問合せは事務局(菅原・清水)まで

会員便り(その一)

小見川からの手紙

小見川漢詩研究会 高木 進

昨年秋、詩友林和夫さんが他界、私より五才若かったので、誠に残念です。私も八十八歳の誕生日はすでに過ぎました。気だけは頑張っているも体はついて来ません。去る、四月二十五日小見川文化協会の総会で、長年勤めていた監事を辞めました。皆様が親切にしてくださいイゴコチが良かったので、つい長居をして深く頭を下げました。

地域の文化協会で漢詩部のあるのは小見川だけですが、若い住職さんが二人おります。皆様のご指導に当たっておられ、安心です。毎年、小見川高校の文化祭には漢詩を展示しております。

役員の皆様に親切にしてください、ご恩返しをと常に考えて体が弱って何もできなくなつて百姓の爺さんで果てるだけになりました。千葉県漢詩連盟も出席できませんのでお暇を頂きたくよろしくお願ひします。永い間のご指導を深謝いたします。連盟のご発展と皆様のご健勝をお祈りします。

扱て、職を退くに際して拙詩二首詠みました。乞うご一笑。

老江湖

高木 進

誤將監事列機枢 誤つて監事を將て機枢に列なり
三益友私資我愚 三益の友は私に我が愚を資く
耄不回童移歲月 耄は童に回らず歲月移る
温情感謝老江湖 温情感謝して江湖に老ゆ

桂冠

桂冠陋巷得清閒 冠を桂け陋巷 清閒を得たり
儘教孤雲野鶴鰥 儘教(さもあらばあれ)
孤雲野鶴の鰥

毀譽勿論如一夢 毀譽論ずる勿れ一夢の如し
醒來足慰薰風寰 醒め来つて慰むるに足る
薰風の寰

会員便り(その二)

ホトトギスに関しての検証と実験

青木智江

今年の夏は蒸し暑かった。額から流れる汗を気にしつつ、涼しさを感じる詩を求めて詩題を探る中、薄暗い山麓に啼くホトトギスの声が脳裏に聞こえてきました。

ホトトギスというと、幽玄、寂しい、懐しい、死、血と、涼しいというよりは薄ら寒い感がイメージとしてあります。(怪談話ではないですが、部屋の熱さが少し引いてきたような・・・)これはいい、と感じつつ、ホトトギスを材料にしよう、と、調べ始めました。

先ず気が付いたことは、呼名が沢山あることでした。面白い、と感じつつ、書き出してみま

した。

「杜鵑」「郭公」「鷓鴣」「子規」・・・
「杜宇」「望帝」「思婦鳥」「蜀魂」

伝説によると、「杜宇」なる人物があり、蜀に天より降下して、望帝となったが、その臣鯀の妻と通じ、それを恥じて帝位を譲り去ったが、死後この魂が化して、「ホトトギス」になったという故事から。
「不如帰」・・・鳴き声を写しとった呼名・・・など。

ホトトギスは詩の中では、望郷の念を喚起させる役割がある鳥です。イメージとしてはどの呼名を使っても大きな変化は無いように感じますが、使い勝手はどうなのだろう。詩の何が変わってくるのだろうと、考えているうち、「では、実際に作ってみれば、何かしら見えてくるものがあるかもしれない」と思い到り、作業を始めました。

まずは、偉大な詩人たちがどのように使っていたか、実例を挙げることにします。

宿石磯

元 稹

石矶江水夜潺湲 石矶江水 夜潺湲
半夜江風引杜鵑 半夜江風杜鵑引く
灯暗酒醒顛倒枕 灯暗く酒醒めて枕に顛倒す
五更斜月入空船 五更の斜月空船に入る

宣城見杜鵑花

李 白

蜀国曾聞子規鳥 蜀国曾て聞く子規鳥
宣城還見杜鵑花 宣城還た見る杜鵑花
一叫一廻腸一斷 一叫一廻腸一断
三春三月憶三巴 三春三月三巴を憶ふ

送人自蜀回南游

齊己

錦水東浮情尚郁 錦水東に浮び尚ほ郁る
 湘波南泛思何長 湘波南に泛び思ひ長し
 蜀魂巴狄悲殘夜 蜀魂巴狄 殘夜悲し
 越鳥燕鴻叫夕陽 越鳥燕鴻 夕陽叫ぶ
 韻の都合、平仄の都合、ツツジなどとの組み合わせの妙、故事との組み合わせなどなど、作者の意図が見え隠れしています。なるほど、なるほど。

作詩に挑戦してみました。拙作三首。

杜鵑

青木智江

旅窓破夢杜鵑鳴 旅窓夢を破り杜鵑鳴く
 知是妻孥呼我声 知るこれ妻孥我を呼ぶの声
 皓皓山嶺孤月照 皓皓たる山嶺孤月照り
 牀前中夜算帰程 牀前中夜帰程を算う

懷晁監

月照興園晁監碑 月は興園晁監の碑を照らす
 忽看刻字望郷詩 忽ち看る刻字望郷の詩
 奈良遠想昔人意 奈良遠く想う昔人の意
 何処一声聞子規 何処にか一声子規を聞く

夢故郷

孤牀夢誘故郷天 孤牀夢は誘う故郷の天
 姉妹相遊摘草妍 姉妹相い遊びて摘草妍なり
 蜀鳥一声驚醒処 蜀鳥一声驚き醒むる処
 忽看躑躅正如燃 忽ち看る躑躅正に燃ゆるが如し

○杜鵑の拙詩は前述の「中級修了作品」の最初にもあります。

会員便り(その三)

午睡と夢

薄井蹊山

七月の漢詩創作講座で「午睡」の詩を提出したところ、「午睡や夢には色々な故事がありそれを取り込んで詠んだら面白いのではないか」との指導を受けました。そこで少し調べてみたので、衆知のものもあるかと思いますが、主なものを以下に記してご参考に供します。

一、甘い眠り

○黒甜(こくてん)、黒甜の郷・・・黒甜は北方の方言で昼寝、午睡のことをいう。黒は眠りの世界を指し、甜は甘い意。即ち「黒甜」は「甘美な眠り」ということで、午睡の心地良さを言い得ている。「南人酒を飲むを以て軟飽と為し、北人晝寝を以て黒甜と為す」とあるのを受けて、蘇軾は「三盃軟飽の後、一枕黒甜の餘」と詠んだ。「発広州詩」

○華胥(かしよ)の夢・・・黄帝(中国 古伝説中の帝王)が昼寝をして、理想的な平和な国「華胥の国」に遊んだ夢を見たという故事に基づいて、「午睡」「良い夢」を意味する。「華胥の国に遊ぶ」とは、良い気持ちで昼寝することをいう。「列子・黄帝」

二、栄耀栄華のはかなさ

次の二つはいずれも、人生の栄耀栄華のはかないことに喩えている。

○槐安(かいあん)の夢、南柯の夢・・・唐の淳于禁(じゅんうふん)が酒に酔って庭の槐(えんじゅ)の木の下で眠ってしまった。夢の中で二人の使者に迎えられて槐安国に至り、南柯郡の太守となつて栄華を極めた。二十年後に送り返されたが、そこで夢から覚めてみれば、槐安国とは槐の木の下にいる蟻の国であり、南柯郡はその木の南向きの枝であつたという故事。

○邯鄲(かんだん)の夢、黄粱一炊の夢・・・唐の盧生(ろせい)という青年が邯鄲の宿舎で、道士の呂翁から栄華が意のままになるといふ枕を借りて寝たところ、五十年間、栄耀栄華な生涯を送つた夢を見た。目覚めてみると、枕頭の黄粱の飯がまだ煮えないほどの短い間の夢であつたという故事。「李泌・枕中記」一炊の夢、黄粱の夢、呂翁の枕、盧生の夢なども。

三、吉兆は正夢だつた

○三刀の夢・・・出世する吉兆の夢をいう。三刀は州の隠語。州の字は昔は刃と書いた。晋の王濬(おうしゅん)が三刀に更に一刀を益す夢を見た処、後に果たして益州の刺史(長官)になつたという故事による。「晋書・王濬伝」

四、時にはあきらめも必要

○蕉鹿(しょうろく)、蕉鹿の夢・・・あきらめのよいこと、また人生の得失は夢のようにほかないことの喩え。昔、鄭の国の人山中で鹿を殺し芭蕉の葉で覆い隠しておいた。ところがその場所を忘れてしまい、(人に盗まれてしまった、とする本もある) あれは夢であつたとあきらめたという故事に基づく。「列子・周穆王」

五、青春の懐古

○揚州の夢・・・杜牧は揚州に赴任していた頃、夜毎に紅灯の巷に遊んだ。後に「あの楽しかった日々も今は過去のはかない夢となつてしまつた」と追憶して次の詩を詠んだことから、遊興に耽つた青春の懐古の情をいう。「杜牧・遣懷詩」十年一覚す揚州の夢、羸(か)ち得たり青楼薄倖の名

六、きぬぎぬの別れ

○巫山の夢・・・楚の懷王(懷王)の長子の襄王とする本もある(が)高唐に遊び、昼寝して夢に巫山の神女と会つて契つた。神女は別れぎわに「私は朝には巫山の雲となり夕べには雨となつて、あなたにお目にかかりましょう」と言い残した。翌朝、王が見ると果たしてその通りだつたという故事から、男女の情のこまやかなことや情事の喩えとされる。巫山の雲雨、朝雲暮雨、陽台の夢、高唐の夢なども。「宋玉・高唐賦」

七、夢かうつゝか

○胡蝶の夢、莊周の夢・・・莊子(莊周)の尊称は胡蝶になつた夢を見たが、夢から覚めて、自分が夢で胡蝶になつたのか、もともと胡蝶である自分が夢で莊周になつたのか分からなくなつたという故事。現実と夢の区別がつかないことや物我一体の境地などに喩える。また単に夢の意にも用いられる。「莊子・齊物論」

以上

「トピックス」③

鷺野会長が東邦大学で漢詩講座を開催されました！



講義中の鷺野会長

平成二十六年八月十八日から六日間、鷺野会長の「漢詩を楽しむ」が東邦大学理学部・習志野キャンパスで開催されました。何と受講料・資料代は無料。最も暑い週ではありましたが、受講生は定員五〇名を超える八〇名でした。今回は、六朝時代の陶淵明、盛唐時代の李白、杜甫の詩を取り上げ、それぞれの生き方や作風の特徴を、時代背景や詩人の境遇に触れながら、それらの作品の意味するところをわかりやすくお話されました。作詩に当たっての要諦などもワン・ポイント的に織り込まれ、配布された「文学地図」で名詩のふるさとを辿りました。「早に白帝城を発す」では「猿声」に耳を傾けると、その類の珍しい現地録音が披露されて、「キーツキーツ」とつんざくように啼くさまが、お馴

染の「キヤツキヤツ」の感じとは成る程大違いであることが確認できました。漢詩ワールドに陶然と浸つた六日間は、望外の「サマー・スクール」と相成りました。

「人間至宝の生き方」への箴言集『醉古堂劍掃』を読む(四) 清水落山

明代の教養人陸紹珩(りくしゅうこう)が長年愛読した古典の中から会心の名言・嘉句を収録した「醉古堂劍掃(すいこどうけんすい)」についての安岡正篤先生の講演録から抜粋して紹介して四回目となります。

野人・別天地の楽しみ(その一)

『枕を邱中に高くし、名を世外に逃れ、耕稼して以て王悦を輪(いた)し采樵して以て親の顔を奉じ、新穀既に升(みの)り、田家大いに洽(うるお)い、肥疔(ひちよ)煮て以て神に享し、枯魚燔(や)きて而して友を招(よ)び、蓑笠戸に在り、桔槔(きっこう)空しく懸る。濁醪(だくろう)相命じ、缶(ふ)撃ちて長歌す。野人の楽しみ足れり。』

「枕を邱中に高くし」とは官途に就かず、民間にあって枕を高くして眠ること。名を世の外に隠して、田畑を耕して租税を納める。草を採り木を伐り、「以て親の顔を奉じ」、親を喜ばせ

る。「新穀既に升起、田家大いに洽い」、太った子羊を煮て神に捧げ、自分は干物を焼いて友を招く。蓑笠は戸に懸けてあり、「桔槔」ははねつるべのこと、それが空しく懸っている。「濁醪相命じ」、どぶろくを取り寄せて、缶(酒を入れる素焼きの土器)を撃って長歌する。「野人の楽しみ足れり」。読むだけでも気持ちがいい。田園の生活、山野の悠々として自在な生活が、よく短い文章の中に躍動しておる。

野人を辞書で引いてみると、「庶民」「かざり気がなく真心のある人」「いなかも、礼儀を知らない粗野な人」(新字源)とある。また、引用例に「野人無暦日(やじんれきじつなし)田舎に住んで、世間と無縁な人には、こよみの必要がない」とある。しかし、文章をみると、田舎者、粗野な人についての記述ではなく、教養人の擬似願望の要素を含んでいるように思える。隠棲の楽しみ、自然との関わりは現代人も常に求めている。

定年退職して、自在な田舎暮らしを夢見る人は今や多いと聞く、蓑笠は戸に懸けてなくとも干物を焼いて友を招くことはできそうだ。

平仄の考察(四) 菅原有恒

一、「辞書」の視点

1. 大修館…諸橋徹次『大漢和辞典』
2. 角川書店…小川環樹他『新字源』
3. 大修館…鎌田正他『新漢語林』
4. 明治書院…林古溪著石川忠久補…

5. 畏三堂…橋爪貫一編…康熙帝御製…『訓蒙康熙字典』

*辞書の韻字の読み方

①単一の韻目…□の四隅に印がある。

注…「○」内は現代中国語の四声

- ・左下…平声韻…(一、二声)
- ・左上…上声韻…(三声)
- ・右上…去声韻…(四声)
- ・右下…入声韻…(一声、四声)

②両韻…同意同声韻…例(涯○…支・麻・佳) 韻目が縦に並べてある。

…同意異声韻…例(看○…寒○…翰○) (いわゆる両韻…平仄にかかわらず使用可)

③両韻…異意同声韻…行(ゆく…庚○…つら…陽○) 異意異声韻…中(なか…東○…あたる…)

韻目が□□のように横に並べてある。

*意味の違い等による両韻…□、□の区分によって用いられる。

*これを両韻と勘違いして用いていることが多い。

④仮借字…意味は同じだが、借りた字…例…倉。 □陽○…「くら」の意、正しい。

□漾…悼む…愴の代わりに文で用いられた。詩では「愴」を用いるのが正しい。この韻×。

*これを両韻と表示している例は多いが、韻書にはほとんど出てこない。

二、「韻書」の視点

1. 台湾會文出版社…江都余照春亭・『詩韻集成』*佩文韻府出

*一、二共に存在する字のみ用いることが肝要。

「トピックス④」 鷺野会長が

NHK・Eテレに出演されました!



TV出演中の鷺野会長

平成二十六年九月七日(火)の「吟詠・秋を迎えて」と題して、吟詠する「和歌・漢詩」の内容について、わかりやすく、簡明に解説されました。

近著紹介

- 顧問 石川忠久著『茶を詠う詩』―『詠茶詩録』詳解(研文出版、二〇一一年五月発行)
- 顧問 石川忠久著『江都晴景―わが心の詩』(研文出版、二〇一二年四月発行)
- 林古溪編・顧問 石川忠久補『平仄字典』(明治書院、二〇一三年一月発行)
- 会長 鷺野正明著『初めての漢詩創作』(白帝社、二〇〇五年九月発行)
- 会長 鷺野正明著『漢詩集 花風水月』(平電子、二〇一一年五月刊行)
- 千葉県漢詩連盟編 漢詩集『房総風雅』第二集(二〇一〇年九月発行)
- 千葉県漢詩連盟編 漢詩抄『千葉詩藻』第二号(二〇一三年三月発行)

全日本漢詩連盟短信

○全日本漢詩大会福岡大会(予定)

日時…平成27年十月十七日(土)

場所…福岡県太宰府市会場未定

応募期間…平成27年二月以降

千漢連 今後の予定

○第十四回吟行会(滝不動・鎌ヶ谷大仏等)

日時…十一月六日(木) 十時

場所…新京成線滝不動駅

○第二十六回研修会(梁川星巖・第十二回)

日時…十二月七日(日) 十三時-十五時

場所…船橋中央公民館

○第二十七回研修会兼新年会

(特別講師 国士館大学 大場一央先生)

日時…平成27年二月十一日(水・祝日) 十時

場所…未定

□『房総風雅』第三集募集!

締切…平成26年十二月末日厳守

発表…平成27年九月十二日(土)

十周年記念大会席上

以上 今回の会報に案内状を同封してありますので、出欠のご返信を必ずお願いします。

年会費未納の皆様へ!

平成二十六年年度年会費納入のお願い

未だ納めておられない方は、年会費(千五百円)の送金を左記口座にお振込願います。

なお、前年平成二十四年度年会費を未納の方は、二年分(三千円)をご送金下さい。

①ゆうちょ銀行のATMで自分名義の通帳から、「千葉県漢詩連盟」の口座(記号一〇五五〇-番号七三二一六二二五二)へ機械の指示通りに送金すると今のところ送料が無料です。

②窓口で現金を出して送金を依頼すると、別途手数料がかかりますのでご注意ください。ATMのやりかたがわからない時は、ゆうちょ銀行の係りの人にお尋ね下さい。尚、三年間未納の方は当月末日を以って自動退会とさせていただきます。

投稿規定

会員の所属する団体の紹介、会員著書の紹介、漢詩の投稿、千葉県の先哲の漢詩・詩碑等の紹介など事務局へご連絡下さい。

「千葉詩壇」へ奮って作品を投稿して下さい。なお、締切日は、二月末または八月末です。

投稿は、毎号一人絶句二首(律詩一首)とし、会長による批正が行われることがあります。

なお、会報掲載以外に、会長の添削をご希望の方は、一首につき一千円を納入の上、返信用封筒を同封し、事務局までお送り下さい。

会員動向

*入会者*芳野禎文(個人)、櫻井宏行(桃李書院)齋藤 聡(復帰・国士館)、以上三名

*退会者*渡辺秀夫・高木進・清水騰波・大日向真紀子・飯谷秀子 以上五名

・会員数…一〇二名(平成二十六年十月一日現在)

編集後記

会報十九号を送ります。

今回は石川先生の鱸松塘の講演録を載せました。聴いては勿論楽しかったわけですが、読んでも楽しいものがあります。会員も漸く百人の大会にのりました。まずは、会員数百五十人に向けて、会員皆様のロコミを宜しくお願い致します。(菅原記)

連絡先・入会申込先

千葉県漢詩連盟事務局 菅原有恒方

〒276-0023 八千代市勝田台二二一七一

電話&FAX 〇四七-四八四-九三三五

・振込銀行…ゆうちょ銀行

・口座番号…一〇五五〇-七三二一六二二五一

・口座名…千葉県漢詩連盟

・尚、入会をご希望の方がおられましたら、事務局までご連絡下さい。